

## スタニスワフ・ヴィスピャンスキの辞世の詩

栗原 成郎

19世紀末から20世紀初頭にかけて「若きポーランド」の芸術運動の美学理念のもとに『婚礼』、『解放』、『アクロポリス』などの一連の象徴劇を創作してポーランド演劇に新時代をもたらした劇作家、ポーランドの美術館を飾る肖像画、風景画の名作を世に残した画家、クラクフの聖マリア教会の内部装飾や聖フランシスコ教会のステンドグラスのデザインなど、広範な美術領域にわたって活躍した多才な芸術家スタニスワフ・ヴィスピャンスキ Stanisław Wyspiański (1869-1907) は、短命で38歳で世を去った。彼は、「辞世の句」と言うべき詩を2編残した。その一つは次の詩―

### わたしの墓前では誰にも泣いてほしくない Niech nikt nad grobem mi nie płacze

わたしの墓前では誰にも泣いてほしくない  
ただひとりわが妻を除いては  
きみたちの犬の空涙も 取り繕った悲嘆も  
わたしには何の役にも立たない

わたしの柩の上で吊いの鐘を鳴らすな  
慟哭の泣き歌も聞きたくない  
わたしの埋葬には雨が泣けばよい  
強風が吠えればよい

志のある者は 土の塊を  
わたしの息が詰まるまで投げ込むがよい  
わたしの土塚の上には太陽が照りつけ  
乾いた赤土を焼くがよい

そしてできれば何時か 何時かまた  
わたしが寝ていることにうんざりする時、  
自分を閉じ込めている仮庵を毀して  
太陽に向かって駆け昇るだろう

明確な姿をとどめて飛びゆく  
わたしを、きみたちが目にした時は、  
私自身の言葉をもって  
わたしを呼び戻してくれたまえ

わたしが星となって天界への道を  
通りゆく時に その言葉を聞いたなら  
わたしは わたしを滅ぼそうとした労苦に

いまひとたび 挑むだろう

1903年7月22日 リマヌフにて

もう一つの詩は―

### わたしがこの世を捨て去る日が来たとき Gdy przyjdzie mi ten świat porzucić

わたしがこの世を捨て去る日が来たとき  
わたしは、自分のための吊いの歌を  
いったいどんなメロディーで自ら口ずさむことにな  
るのか？  
なにしろわたしは、とっくの昔にこの世を捨て去っ  
たのだから。

わたしが、もはや縁の切れた懐かしい事どもを  
嘆き悲しむのをやめてから すでに久しい  
わたしの悲しみを取り戻し、盗み取られてしまった  
ものを  
奪い返すことなど どうしてできよう。

わたしは、失われた楽園の夢を  
とっくの昔に捨てたのだから。  
どこかの川のほとりで、どこかの国で…  
生きている者として名を呼ばれるために…  
わたしは生きているのだから。

どこかの町の、どこかの川のほとりで  
わたしは女と結婚の誓いを立てた。  
そこで女と自分のために家を建てた、  
それを一つの共同の墓地と考えて。

共同の住処であるその墓の上には  
風が吹いてきて小枝たちを折るがよい。  
秋の雨をとまなう嵐の中で  
枯れしおれた、もろい小枝たちを。

そうすれば、わたしは墓の中でおのずと聴くだろう  
雨が人の世で激しい雨音を立てるのを。  
壁の向こう側でその雨音を聞くと、  
わたしは、再び朝に目覚めることを知る。

朝、太陽がわたしに輝き、  
明るく照り輝いて、力強く暖めてくれればよい。

墓にわたしの子どもたちが遊びに来て、そのうちの一人の子が  
笑い声を立てくれれば、それでよい。

1903年7月7日 リマヌフにて

これらの詩が書かれたとき、ヴィスピャンスキは悪疾に苦しみながら、ベスキド山脈の山裾の保養地リマヌフに蟄居し、創作にいそしんでいた。ヴィスピャンスキは抒情詩人でもあったが、自作の詩に対しては峻厳な態度で臨み、公表を拒否し、いくつかの詩を焼き捨てるように友人たちに頼み、自らも意に満たぬ作品を焼却したらしい。死を強く意識したこの2編の詩は、親友でクラクフ劇場の舞台俳優のレオン・ステンポフスキ **Loen Stępowski** (1852–1914) に宛てた私信の中に挿入されたもので、焼失を免れて今日に伝えられた。

### 妻子に対する限りなき愛情

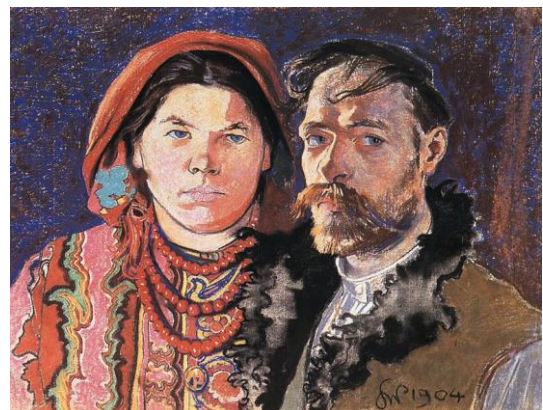
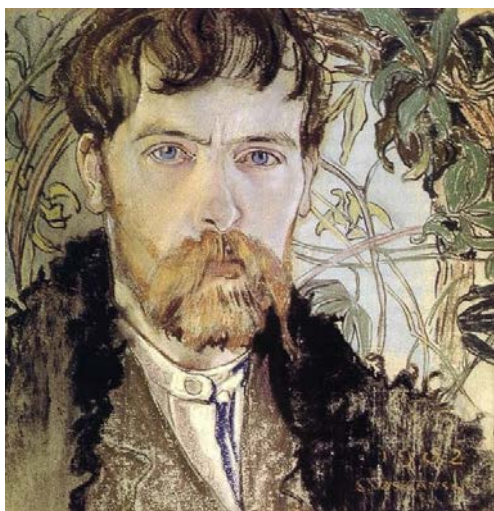
これらの詩には、妻子に対する限りなき愛情と不死(復活)の信念と自己の芸術の不滅の精神が強烈に表現されている。ヴィスピャンスキの家族関係は、妻や子どもをモデルにした彼の美しいパステル画から想像できる。「母性 **macierzyństwo**」と題するいくつかの類似の絵画のうち、若い母親が乳飲み子に授乳し、二人の少女が優しくそれを見守っている絵(1905年作、クラクフ博物館所蔵)は最も有名である。類似の絵の授乳する母親のモデルは、いずれも横顔の美しい若い女性である。私は、ヴィスピャンスキの夫人も美しい女性であろう、と想像した。ところが、「妻と共なる芸術家の自画像」(1904年作、クラクフ博物館所蔵)を見ると、やつれた姿の画家の隣に描かれている夫人は、どう見ても野暮ったい農婦であり、しかも怒ったような怖い顔をしている。「農民服姿の芸術家の妻」(1902年作、ワルシャワ博

物館所蔵)の女性も厳しい顔つきである。

ヴィスピャンスキ夫人について詳細は知られていない。彼女は名をテオドーラ・テオフィーラ・ピトコ **Teodora Teofila Pytko** といい、クラクフの西方、ジャブノ近郊の村の出身。芸術家は、彼女をテオーシャ **Teosia** という愛称で呼んでいたという。テオドーラはクラクフに出て、聖フランシスコ教会の改修工事を手伝っていた。その時、聖堂のステンドグラスの制作に従事していたヴィスピャンスキと知り合い、婚外の子どもを産んだ。クラクフ市当局はそれを把握していなかったため、戸籍等の記録は正確性を欠く。テオドーラは3人の子をもうけた。のちに、芸術家は、妻を籍に入れ、妻子を愛した。彼の描く子どもの絵はいずれも美しい。しかし、当時のポーランドは貴族社会であり、貴族と農民との結婚は、いわゆる“**mésalliance**”(身分違いの不釣り合いの結婚)でスキャンダルの対象だった。それに、芸術家の病気は、当時治療不可能とされた梅毒であった。妻のテオドーラは、当然そのことを承知していた。肖像画に見られる彼女の不機嫌そうな顔は、それを匂わせている。彼は、1890–1895年のヨーロッパ遊学中にどこかでこの病気に感染したらしい。死が迫ったとき、ヴィスピャンスキは妻と子どもを妻の田舎に返したかフランシスコ会の修道士に養育を託したかしたらしい。

1907年11月28日ヴィスピャンスキは世を去った。「わたしの墓前ではだれにも泣いてほしくない。ただひとりわが妻を除いては」という願いとは異なり、彼の葬儀には4万人を超える人が参列して、偉大な芸術家の死を悼んで泣いた。(くりはら しげお)

※ ヴィスピャンスキ「わたしの墓前では誰にも泣いてほしくない」は「午後のポエジア」5(2015.6.13)において、エヴァ・コヴァルスカ **Ewa Kowalska** さんと新井藤子さんによって朗読されました。



(左) ヴィスピャンスキ自画像 (1902)  
(右) 妻と共なる芸術家の自画像 (1904)

Wikipedia ポーランド語版より